



映画GIFTを贈りたくなるアイデア

福利厚生制度の“見えにくい課題”

多くの企業が福利厚生制度を導入している一方で、現場では次のような課題が浮かび上がっています。

「コストの増大」：45.9%

「利用制度の偏り」：36.8%

「利用率の低さ」：34.2%

制度が“ある”のに、使われていない。

社員は福利厚生制度の存在を知っていても、
中身を把握しておらず、
使いにくさやハードルを感じている。

人事部は制度を整えても利用率が伸びず、
手応えを感じられない。

社員と人事部がそれぞれの立場で
努力しているのに、制度が“使われない”
という結果だけが残る。

この“すれ違い”こそが本質。制度は“存在している”だけでは、届かない。

その理由は、“届け方”にあった。



制度があるだけでは、使われない。

「知らなかった」

「使い方がわからなかった」

「面倒だった」

それは、利用者のせいではない。

自分から取りに行かないと使えない制度ではなく、
日常の中で自然に届けられる仕組みが求められる。

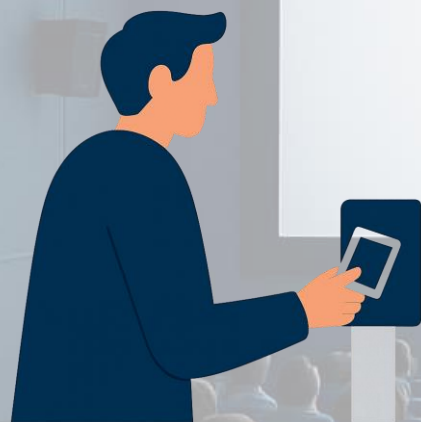
制度を生かすかどうかは、“届け方の設計”次第。

定時で退勤した社員に、突然届くサプライズ制度。

“ピッ”と退勤がきっかけに！

“ある日、突然” 月1回のランダム配布！

“半年有効” 自分のタイミングで！



※SlackやTeams、メールなど会社インフラに合わせた通知形式を選択可。

「今日は定時に帰ろっかな」から、会社のカルチャーが変わる。

定時で退勤した社員に、突然届くサプライズ制度。

届く設計

勤怠管理システムに連携し
自動配信することで
「取りに行かない制度」を実現

気づきの演出

期待していない日常に
突然届く
さりげないごほうび

語られる体験

映画という共通体験が
社員同士の何気ない会話を生み
社内のつながりを育てるきっかけに

社員にも人事にも、ちゃんと届く制度です。

 社員にとってのメリット	 人事部にとってのメリット
● 定時退社が“ちょっと嬉しいこと”になる	● 定時退社の行動促進につながる制度設計
● 自分の行動が“見られていた”という承認感	● 客観的なログデータで効果測定が可能
● 映画という共通体験が会話を生む	● 社内コミュニケーションの活性化につながる
● 「贈られた映画」で作品との新しい出会い	● 福利厚生制度の“文化化”を後押しできる
● 意外性のあるご褒美がモチベーションに	● 工数少なく、既存インフラと連携して導入可能

仕組みはシンプル。届く仕掛けはスマートに。

1

勤怠システムと連携

社内の打刻データを活用して、
定時退勤をトリガーに設定。

勤怠システム一例

ジョブカン
勤怠管理

クラウド勤怠管理システム
KING of TIME

free 人事労務

Smart 打刻

2

自動抽選と配信設定

月1回の抽選タイミングと
配信対象者のルールを設定。

抽選ロジックは、シンプルな
ルールベースで構築。

人事システムのCSVデータを
活用することで、特別なツール
は不要。

3

通知で“届ける”

Slackやメールなど、
社内インフラに合わせた方法で
映画GIFTが届く。

通知アプリ一例



映画GIFTは、あえて制度の詳細を社内に告知しません。

社員が“ある日突然”通知を受け取るサプライズ設計により、
制度そのものよりも先に、「驚き」や「会話」が広がる仕掛けです。

Slack やメールなどの通知を通じて、「〇〇さんに映画GIFTが届きました」というメッセージが流れると、
「なにそれ?」「どうやったら届くの?」という声が自然に生まれます。

この“話題が先に届く”スタイルは、従来の制度説明とは異なり、
社員同士のリアクションから制度が広がるという逆転のプロモーション。

定時退社が、「ちょっといいこと」として定着していく。

その小さなきっかけが、映画GIFTの真価です。

会社から届く、さりげないごほうび。それが、社員の心と職場をあたためる。



定時にサプライズを。